

## 教養教育英語科目高年次科目のカリキュラム検証： 学生アンケートを中心とした考察

### Review of Higher-Grade Courses in a Liberal Arts English Curriculum: A Study Based on Student Questionnaires

横内 裕一郎, ソロモン・ジョシュア・リー,  
バードセール・ブライアン・ジョン, 立田 夏子

Yuichiro Yokouchi, Joshua L. Solomon, Brian J. Birdsell, Natsuko Tatsuta

弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター  
*Center for Liberal Arts Development and Practices, Institute for Promotion of Higher Education, Hirosaki University*

#### Abstract

This working paper presents the results of a review of the advanced English curriculum of Hirosaki University. It introduces the former curriculum, explaining the impetus for the overhaul, including in part, flagging enrolment numbers. This is followed by an investigation into class scheduling across the institution as a whole for the purpose of identifying the most appropriate times for holding the classes. The paper then turns to an extensive online student survey ( $N = 752$ ) which produced data on the degree of awareness of the advanced curriculum; reasons for taking/wanting to take the classes; reasons for not taking/not wanting to take the classes; interest in English skills-based classes, academic English, and content-based or project-style classes; as well as interest in a list of course-content topics. The paper concludes by presenting the new curriculum proposal with more detailed justifications, comments on its first full year of implementation, and concerns for future consideration.

**Keywords:** 教養教育英語科目, カリキュラム改革, 高年次英語科目, ニーズ調査

弘前大学における教養教育英語科目は、2023年現在、1年次科目が4種類の科目、高年次科目が4種類の科目で構成されている。2021年度以前は1年次科目がReading, Listening, Writing, Speakingの4種類の科目は初級、中級、上級に分かれて開講されていた。そして高年次科目はIntegrated A, Integrated B Level 1, Level 2, Integrated Cの4種類の科目で構成されていた。1年次科目が科目名から授業内容を簡単に推察できたのに対し、高年次科目の「Integrated」からはその内容が推測できていなかった。Integrated科目の履修者が必修となっていた農学生命科学部国際園芸農学科の学生以外がほとんど受講していなかったことは、科目リストを一見しただけでは授業内容が学生に伝わらないことや、高年次科目の存在自体が知られていないことに原因があると考えた。また、開講している時間帯が他の必修科目等に重なっていないかを検証する必要があると考え、開講情報を整理しつつ受講生が集まりやすい時間帯を探すこととした。そして、高年次科目の科目名の改称と内容の整理を行うため、2020年度に全学生を対象としてWebアンケートを実施した。本稿では、その結果詳細と改革の結果について報告する。

## 旧カリキュラムの概要

弘前大学の教養教育英語科目は『国際共通語としての英語』『順次性のあるカリキュラム』『習熟度別クラス編成』『自律英語学習者の育成支援』を柱としてカリキュラムが構築されている（横内 & 立田, 2023, p. 2）。ここに明確に『順次性のあるカリキュラム』と記載しておきながらも、特に高年次科目において旧カリキュラムが導入されていた2021年度入学者以前の学生にとっては、1年次科目と高年次科目の順次性がわかりづらい傾向にあった可能性が否定できない。高年次科目（以下、旧カリキュラムの高年次科目はIntegrated科目、新カリキュラムではAcademic Englishと表記）は2017年度から開講された。旧カリキュラムでは、1年次科目とIntegrated科目が設定されており、1年次科目は『『大学以外の教育施設等における学修』の単位認定制度』で履修を免除された学生以外全員が4種類の科目をすべて履修しなければならなかった。旧カリキュラムにおいて1年次科目はReading, Listening, Writing, Speakingの4種類の科目が設定されており、図1のように授業が構成されていた。

図1

旧カリキュラムの科目設定

必須科目			選択科目		
1年次	前期	Listening	2年次以降	前期	Integrated A（国際共通語としての英語）
		Reading		後期	Integrated B（一般学術目的の英語）Level 1
	後期	Speaking		前期	Integrated B（一般学術目的の英語）Level 2
		Writing		後期	Integrated C（キャリア英語）

一見すると1年次科目は4技能に分かれていることから科目の連続性、順次性があるようにも思えるが、立田他（in press）に記載、及び後述する教科書問題をはじめ、様々な要因で実際には順次性が保てているとは言い難い状況であった。また、1年次科目とIntegrated科目との連結性がほぼ無く、Integrated科目の名称と内容もIntegrated科目の設計者が弘前大学から離れていたことと、後付で国際園芸農学科の必修科目となったことなどの要因から2016年度時点では手探りで授業計画を進めざるを得なかったという状況があった。特に、国際園芸農学科の必修科目となったことにより、ほぼすべてのIntegrated科目の履修者が当該学科の学生になってしまうということがある、他の学部学科の学生には入りづらい環境ができてしまっていた。科目の連続性、順次性の観点に話を戻すと、特にIntegrated科目はAで扱う内容が「国際共通語としての英語」であり、これも具体性に乏しい。2つレベルのあるIntegrated Bは「一般学術目的の英語」をTLU（Target Language Use）としているが、実際のところ文法や若干のWritingを扱う程度で学術レベルの講義は履修者のレベルを考えても難しいところがあった。これは、履修者に問題があるということではなく、1年次科目で使用される教科書が極めて多種多様であったため、そして多数の教員（毎年約35名～40名）が英語教育に関わるという背景から、指導項目等で学習・指導内容がある程度絞ってはいるものの、Integrated履修者が1年次に学んできた内容に差があるため「一般学術目的の英語」を指導するにしてもどこから手を付けてよいか不明瞭であったことが主な理由である。2020年度以降に入学した学生には『弘前大学教養英語科目学習ガイドブック』を配布しており、その中に記載されているAcademic Writingの基礎（e.g., paragraph writingの基礎やthesis statement, topic sentence）などを指導するように教員に周知しているのにも関わらず、指導が徹底されていないのか、その内容をしっかりと理解しないまま2年次生となった学生も複数名いたことは事実である。そのため、1年次科目とIntegrated科目の連結性が全くない状況になってしまったと言える。

この状態を打破するために、教養教育開発実践センターに属する英語部門に現状の報告と改革案を提出するためにIntegratedワーキング・グループ（WG）を立ち上げ、以降英語部門会議にて様々な報告

を行ってきた。具体的には、1年次科目の改革に先立ち、Integrated科目の改革に着手した。これは、上述のとおりIntegrated科目が抱える問題のほうが明らかに1年次科目の問題よりも重く明白で、より多くの学生に履修してもらうことを前提に魅力的なカリキュラムを構築することが優先されると判断したためである。なお、1年次科目の改革内容については、本誌掲載予定の立田他（under review）を参照されたい。以下に、改革のスケジュールを列挙した。2020年3月にWGを結成し、最終的に10月に教員への説明会を開催、その後2月にFDを開催し、次年度以降（実際にAcademic Englishが稼働し始めたのは2023年度から）の英語科目の内容等について説明を行った。

## 改革のスケジュール

まず、2020年にIntegrated科目の改革を目的としたIntegrated WGを結成し、アンケートを中心に問題点を洗い出すことから始めた。以下がIntegrated WGの活動内容である。

- (1) 2020年3月：Integrated WG結成
- (2) 2020年3月：クラススケジュールに関する調査
- (3) 2020年3月：全学生対象のIntegrated科目に関するアンケートの実施
- (4) 2020年4月～：インタビューの実施
- (5) 2020年4月～：Integrated科目の改革についてブレインストーミング  
→後に結果をBirdsell and Tatsuta (2021), Solomon and Birdsell (2022) として発表
- (6) 2021年3月：英語部門会議に新Integrated科目カリキュラム案を提案・承認

WG結成直後に行った活動は、学生に受講してもらいやすい時間帯に高年次科目を開講できるように、スケジュールの調整を行うことであった。WG結成以前の2019年度の履修マニュアルに掲載されているIntegrated科目に関する情報をまとめ、開講時期・曜日・受講に必要な英語運用能力をまとめたものが表1である。

表1

Integrated科目の開講時期・曜日（時限）と設定されている受講目安

科目名	開講時期	曜日（時限）	目安 <sup>a</sup> （TOEIC）
Integrated A	2年次 前期	火曜日（5-6時限）	500以上
Integrated B Level 1	2年次 後期	火曜日（5-6時限）	550以上
Integrated B Level 2	3年次 前期	火曜日（1-2時限）	550以上
Integrated C	3年次 前期	火曜日（3-4時限）	600以上

Note. <sup>a</sup>履修の目安であり、（以下の）点数を取らなければ履修できないというものではありません。（『令和3（2021）年度教養教育科目マニュアル』p. 16）

表1の情報からわかることは、すべての科目が火曜に開講されているということで、この時間帯に必修科目や優先度の高い選択科目が入っている学部・学科の学生は受講しづらいということである。また、明らかに順序付けがなされていることから、必修科目として受講する農学生命科学部国際園芸農学科の学生以外には仮にこの時間帯に空き時間があっても受講しづらい傾向があると考えた。上記のような問題があることがわかったため、次項の調査1と調査2に示すそれぞれの内容を調査して、より効果的に高年次科目を実施できるよう検討を進め、その結果を英語部門に提案し、承認を得た。

## 調査内容・方法

調査1: Integrated科目の実施・受講状況・開講授業数に関する調査

- a. Integrated科目における受講者数・単位取得数（2017年度～2020年度）
- b. Integrated科目とクラスレベルにおける VELC® Score（TOEIC®換算）（2020年度）
- c. 開講授業数（専門科目＋他言語 開講授業数）（2019年度）

調査2: 全学生対象にIntegrated科目に関するアンケート調査（Google フォーム, 教養教育英語科目担当教員に学生周知を依頼, 追調査としてインタビュー調査）

- a. Integrated科目の認知度（1年次生対象）
- b. 受講希望率（1年次生対象）
- c. 受講していた・している・したい理由
- d. 受講しない・したくない理由
- e. 希望の教養教育英語科目（スキル・形態・内容別）

## 結 果

調査1a: Integrated科目における受講者数・単位取得数（2017年度～2020年度）

必修科目である国際園芸農学科の学生のうち、4年次以上のIntegrated科目受講者が年々増加傾向にあり、その理由が1年次科目の単位未習得者が増加傾向にあることが原因であると判断した。さらに、Integrated科目の単位取得率は90%を超えている一方、出席回数不足のための単位未取得者が毎年出ていることが明らかとなった。2017年度～2020年度の間に適宜修得単位となる学生が所属していた学部は次の通りである：人文社会科学部：20名、理工学部：11名、教育学部：5名。一方、国際園芸農学科以外の農学生命科学部と医学部の学生は受講歴がない。この傾向から、理系の学生の登録者数が少ないことが明白となっているため、理系の学生が興味を持つような科目を設定する必要があると考えた。本件については後述のアンケートの結果と併せて考察する。適宜修得単位となる学部での履修登録人数は、Integrated A（28名）・Integrated B Level 1（6名）・Integrated C（2名）であり、2年次開講科目であるIntegrated AとB Level 1への履修登録人数が多い。この結果から、「3年次前期」という開講時期の枠を無くし、すべてのIntegrated科目を2年次中に履修可能となるようにすることとした。なお、本学の短期留学プログラムである『HIROSAKIはやぶさカレッジ』において、Integrated科目は選択必須科目となっている。ただし、2017年度に限り必修科目として設定されていたこともあり、上記の国際園芸農学科以外の学生のIntegrated科目履修者は『HIROSAKIはやぶさカレッジ』へ参加するために受講した学生も一定数いることが推察される。つまり完全に自発的にIntegrated科目を受講した学生はさらに限定的であった可能性があることがわかる。

調査1b: Integrated科目とクラスレベルにおける VELC Score（TOEIC換算）（2020年度）

表2はクラスレベルにおけるVELC ScoreからのTOEIC換算スコアである。表1に記載した通り、Integrated Aの受講目安となるTOEICスコアは500点以上であるが、1年次科目で上級クラスに割り振られていた学生のレベルは十分なレベルと言え、中級の学生も履修条件にかなり近いスコアではあるが基準を下回っていた。初級（国際園芸農学科専用クラス）の平均点は400点と目標スコアを100も下回っており、これまでに共有していた目標はどうしても到達することができないと判断した。そのため、教養教育科目履修マニュアルへの受講目安レベルの記載を取りやめることとした。ただし、1年次年度末に実施される外部試験の結果、もしくは直近の個人で受験した外部試験の自己申告点数に基づき、英語習熟度別に2クラス（＋国際園芸専用クラス）を設定することが望ましいと判断した。これは、履修予定



者が少人数の場合でも、2クラスを設定することで、クラス内での受講生の英語運用能力の差を小さくするように努める必要があるためである。

表 2

クラスレベルにおける VELC Score からの TOEIC 換算平均点（2020年度）

Integrated A レベル	国際園芸	国際園芸以外
上級	587.14	598.89
中級	489.67	488.33
初級（国際園芸専用クラス）	400.94	—

### 調査 1c：開講授業数（専門科目＋他言語 開講授業数）（2019年度）

2019年度に開講されているすべての科目を精査し、開講コマ数を表3の通りにまとめた。表中で網掛けになっている箇所が現実的により多くの学生が受講可能なコマで、取り消し線で消されている箇所（例．月9-10時限）は担当者を確保できないため、Integrated科目を開講できないと判断した。これまで同様、同じ曜日（火曜日）に集中して開講することは得策ではないと判断し、同じ日に複数の高年次科目を集中させないように工夫することとした。また、他科目の開講数が少ない火曜日5-6時限・水曜日7-8時限・金曜日7-8時限に開講すると受講者数が増加する可能性があるかと判断した。金曜の7-8時限は他科目の開講コマ数が少ないため、開講できる学生が多くなる可能性が高い時間帯として最終候補となったが、教員の出張に重なりやすい傾向があることや他の業務と重なる可能性が高いことから、最終的に火曜5-6時限と水曜7-8時限のスケジュールを採用することとした。

表 3

開講授業数（専門科目＋他言語：2019年度）

時限	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1-2	47	40	37	42	32
3-4	84	86	78	61	58
5-6	105	54	77	83	67
7-8	94	54	39	76	52
<del>9-10</del>	<del>57</del>	<del>43</del>	<del>24</del>	<del>64</del>	<del>43</del>

注．網掛け部が他科目の開講数が少ない時間帯、取り消し線は教員の確保が困難な箇所。

### 調査 2：Integrated科目に関するアンケート調査

Integrated科目に関する意識調査・ニーズ調査を行うことを目的とし、Google Formsを用いてWebアンケートを実施した。アンケートは各英語科目担当教員から学生にGoogle Formsへのリンク（QRコード）を提示してもらう形で実施された。回答データの概要は、回答者数753名（インタビュー調査協力者17名）で、男性395名（52.46%）、女355名（47.14%）、回答しない3名（0.40%）であった。回答者の所属学部は人文社会科学部223名（29.61%）、教育学部98名（13.01%）、理工学部159名（21.12%）、農学生命科学部157名（20.85%）、医学部116名（15.41%）であった。回答者の学年は半数が1年生で交換留学生も回答に参加した（1年次生491名（65.34%）、2年次生以上258名（34.26%）、交換留学生3名（0.40%））。また、1年次に受講していた教養英語科目のレベルは、上級81名（10.76%）、中級414名（54.85%）、初級259名（34.40%）と実際の人数分布と同様に中級の学生が半数を超えた。

以下、Integrated科目に関係するアンケートの主要部について報告する。1つ目の項目でIntegrated科目の認知度を検証した。『Integrated科目（Integrated A, Integrated B 1 /B2, Integrated C）という教養教育

英語科目を知っていますか?』という項目に対し、はい=177 (23.51%), いいえ=323 (42.90%), 無回答=253 (33.60%) という回答が寄せられた。「いいえ」の回答頻度が「はい」よりも高く、Integrated科目の認知度は極めて低かったと言わざるを得ない。次の『来年度以降、Integrated科目を受講しようと思いますか?』という質問に対する回答は、はい=126 (16.73%), いいえ=374 (49.67%), 無回答=253 (33.60%) であった。前項目同様、Integrated科目へ対する興味関心が薄いことがわかる回答結果であった。『Integrated科目 (Integrated A, Integrated B 1/B2, Integrated C) という教養教育英語科目を受講したことがありますか?』への回答は、はい=63 (8.37%), いいえ=187 (24.83%), 無回答=503 (66.80%) であった。このアンケートの回答者のうち8%強の回答者が、受講経験がある、あるいは受講中である学生であった事がわかる。それに続く『「はい」と答えた方はどの科目を受講していましたか?』という質問に対し、何らかのIntegrated科目を受講したことがあると回答した回答者は66名であり、前項の結果とずれることとなった。前項で「いいえ」と回答しつつも何らかの科目名を記入した学生は人文社会科学部の学生と教育学部の学生であった。ここまでの項目で学生のIntegrated科目に対する認知度や回答者の属性について確認を行ったが、これ以降の項目で学生がIntegratedに何を求めているかを詳しく検証する。

図 2

受講していた・している・したい理由を教えてください (複数選択可, 「その他」の場合は自由記述可)

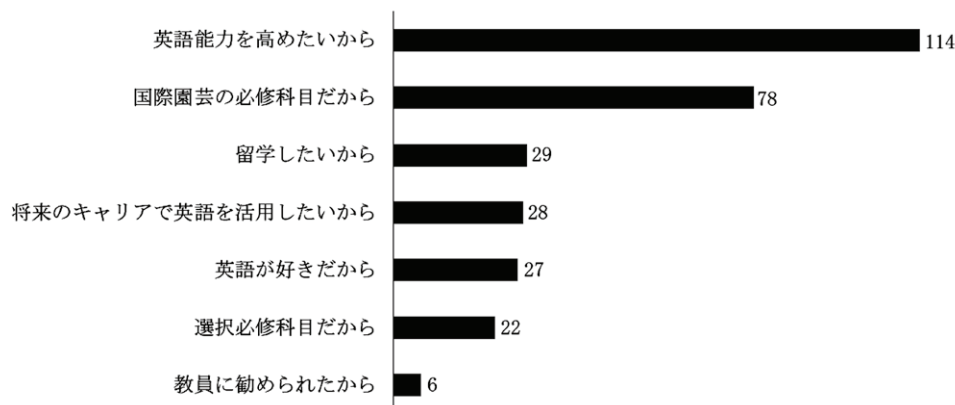


図2の結果から、「英語能力を高めたい」という回答が最頻で、次点が「国際園芸の必修科目だから」であった。2023年度から高年次科目 (Academic English) は国際園芸農学科の必修科目ではなく、選択必修科目となったため、仮にこのアンケートを今行ったら異なる結果となるだろう。しかし、当時の時点では、この結果からして必修なので嫌々受講している学生も一定数いたことが予測される。また、この結果から回答時 (2020年) はIntegrated科目はやぶさカレッジの必修ではなかったものの、選択科目としては認められていたことから「留学したいから」への回答が3番目に多い回答となっていたものと考えられる。「英語能力を高めたいから」という回答は自主的な学習者としての意識の芽生えがあるとみなすことができ、モチベーションの高い学習者が一定数いた事を示す結果であったと言えるだろう。このような学生を更に増やすため、1年次科目でより内発的動機づけを高められるような指導が必要だと考えた。このように、この高年次科目のカリキュラム改革により、1年科目の問題が顕在化され、1年次科目のカリキュラムも改革する必要性が出てきた。

図 3

Integrated科目を受講しない・したくない理由を教えてください（複数選択可、「その他」の場合は自由記述可）

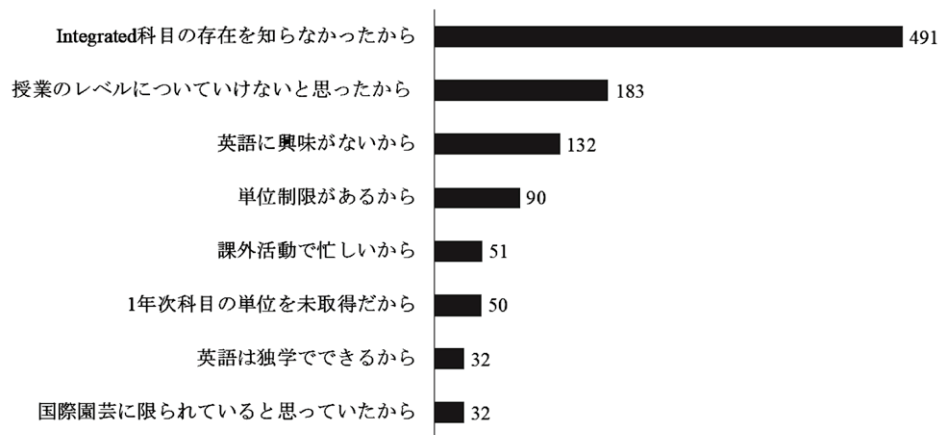


図3ではIntegrated科目を受講しない・したくない理由について質問を複数回答可として学生に質問した。この項目で圧倒的に回答が集中したのは「Integrated科目の存在を知らなかったから」であった。少なくともこの時点では教養教育英語科目のパンフレットを通じてIntegrated科目の周知を図るよう各教員に通達がなされており、ワーキンググループ・英語部門員の教員はIntegrated科目についてReadingあるいはWritingの初回授業では周知していたはずである。しかしながら、今回の調査において半数以上の回答者が存在自体を知らなかったと回答したことは、Integrated科目についての紹介が疎かであったか、学生にとって印象が薄いものであったと反省せざるを得ない。ただし、本調査を実施した2020年度に比べ、現在はAcademic Englishとして新たなカリキュラムを運用しており、その内容も『教養教育英語科目学習ガイドブック』に丁寧に記載するようにしたことから、Academic Englishの認知度については以前よりも改善されたものと思いたい。本件については時期を見て改めて検証を行う必要があるだろう。『授業のレベルについていけないと思ったから』という回答が183件もあったことも対応が必要となったポイントであろう。当時は1年次科目に初級・中級・上級のレベル名がついており、特に初級や中級の学生にとってはIntegrated科目のハードルが高く感じられたのではないだろうか。そのため、現在ではこの点も考慮し、1年次科目にクラスレベル名を記載しないこととした。ただし、実際にはプレイメントテストでクラス分けがなされていることを明記しておく。もう1点興味を引く回答は、『1年次科目の単位を未取得だから』が50名と相当数いることである。本アンケートへの回答リンクが再履修クラスの学生にも配布され、回答がなされた可能性があることを鑑みれば、この項目への回答がある程度多くなることは想定範囲内となるだろう。しかし、Integrated科目及びAcademic Englishの受講の前提が「1年次科目4科目すべてを履修することが受講上のハードルになっていることは確かである。また、追加インタビューでは「科目名が分かりづらい」「Integrated科目が何をしているのか分かりづらい」という回答が寄せられており、科目名をわかりやすい科目名に変更する必要があると判断した。

図 4

教養教育英語科目で、以下のスキルを中心に扱った科目が開講されるとすれば、どのくらいそれらに興味がありますか？ [一般英語: listening/ reading/ speaking/ presentations/ writing]

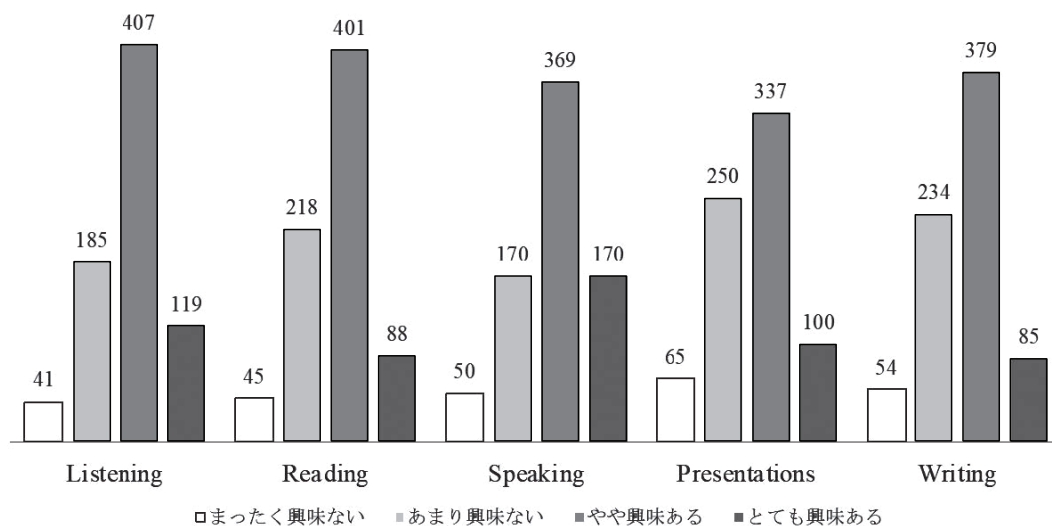
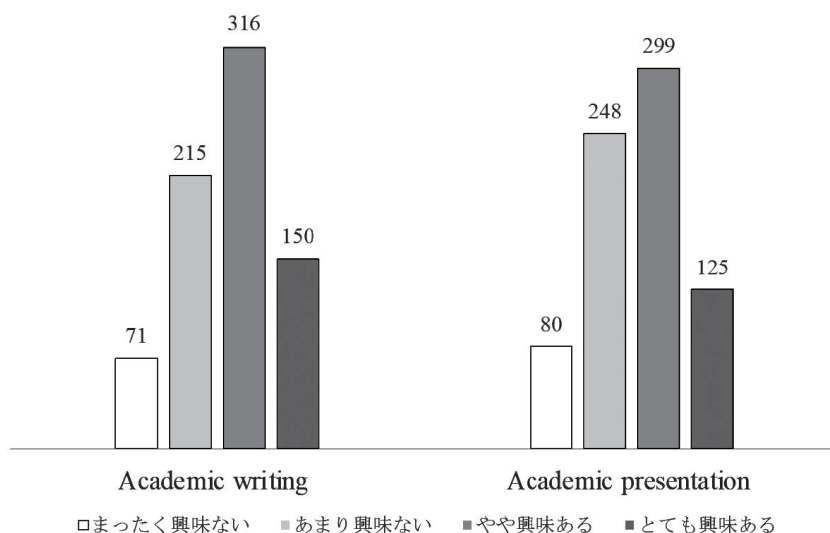


図 4 では、Academic English においてどの技能を扱った授業が学生に期待されているかを明らかにするための質問がなされた。「とても興味がある」と「やや興味がある」の和を技能順に並べると、 $S > L > R > W > P$  の順で、特に Speaking と Listening への関心が高い事がわかる。この結果は、我々が Academic English でどのような授業を構築するべきかを考える上で重要な情報となった。全体的には回答は中心化傾向が見られており、回答者はどの技能も必要と感じている中で、Speaking と Listening への興味・関心が強かったという事実は英会話 (Interaction) ができるようになりたいという学生が多いことを示している。インタビュー調査においても (大学院を含めての) 授業で使うためのアカデミック英語や日常的にコミュニケーションが取れる Speaking と Listening を学びたいという希望が多かった。

図 5

教養教育英語科目で、以下のスキルを中心に扱った科目が開講されるとすれば、どのくらいそれらに興味がありますか？ [アカデミック英語: writing (例: 卒論の書き方) / アカデミック英語: presentations (例: 学会発表の基礎)]





Academic 英語に関する質問については、4 技能に比べるとやや「あまり興味がない」「まったく興味がない」に対する回答が増える傾向となった。ただし、Academic writing と Academic presentation の「とても興味がある」は図 4 に示した 4 技能の分布と比較しても Speaking に次いで興味がある項目であると言えるだろう。つまり、Academic な内容を扱う授業に対する授業については興味の有無がある程度くつきり分かれたことがわかった。

続いて、Academic English で扱う授業内容についてアンケートを行った。CLIL, PBL, SDGs に関連した内容で、その形式内でどのような授業形態が好ましいかを調査した。図 6 に記載したとおり、PBL と SDGs については「あまり興味ない」が最頻値となり、全体的に見ても否定的な回答が多くなった。CLIL については回答がほぼ割れたが、「やや興味ある」と「とても興味がある」の回答が否定的な項目の総数よりは多く、PBL, SDGs より CLIL の方が学生からしたら望ましい授業形式であると判断した。そして、そこで扱うべき内容について図 7 でとりまとめた。

図 6

教養教育英語科目で、以下の内容を中心に扱った科目が開講されるとすれば、どのくらいそれらに興味がありますか？ [CLIL（内容言語統合型学習）/ PBL（問題解決型学習）/ SDGs（世界規模の問題を取り上げる授業）]

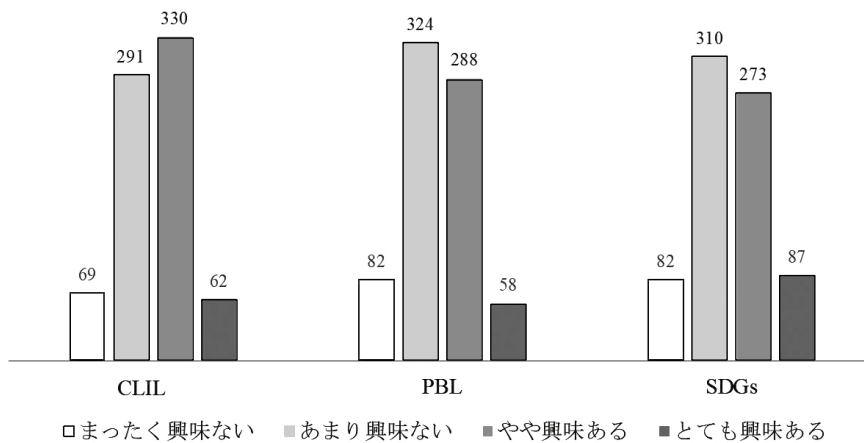


図 7

教養英語科目で学習したい「内容」を以下の中から選んでください。（複数選択可）

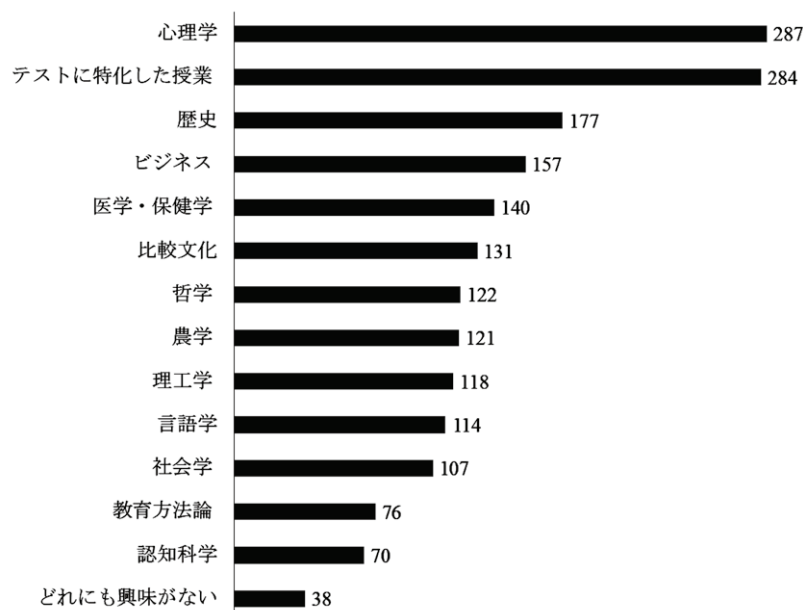


図7では教養教育英語科目（Academic English）で扱ってほしい「内容」を調査した。その結果、「どれにも興味がない」が最も少なく、回答者らはいずれかを選択するか、あるいは「その他」で特定の内容についてコメントをしていたことがわかる。アンケートの結果、「心理学」と「テストに特化した授業」が他の項目を抑えて圧倒的に多かった。この2つのテーマは異なるタイプの授業を展開できるため、2つの異なる授業として開講することとした（CLIL, English for Tests）。以下、歴史、ビジネス、医学・保健学と続いたが、現実問題として担当教員が指導できる内容かつ教科書を用意できるかという問題も生じたため、現実的に指導できる内容は心理学、テストに特化した授業、歴史、ビジネス、比較文化、言語学などに限られると判断した。理系の学生がIntegrated科目を受講しない傾向があるのは授業内容に問題がある可能性があると考えたが、実際には医学・保健学がやや多めだったのに対し、農学や理工学を希望する学生は特段多いわけではないことがわかった。したがって、理系の学生に興味を持ってもらえるような科目を今後検討していく必要があるだろう。

### 新カリキュラム案

ここまで紹介してきた検証結果を踏まえ、高年次科目（Academic English）の新カリキュラムの素案を作成した。次の表4に新カリキュラムの案を提示する。

表4  
新カリキュラム案

調査結果	新科目名	内容
1 一般英語 Speaking	English for Global Communication	Communication Debate
2 アカデミック英語 Writing/ Presentation	Academic Writing & Presentation	Academic Writing Academic Presentation
3 テストに特化した授業	English for Tests : ○○	英語試験対策
4 CLIL	Content and English Integrated Learning : ○○	CLIL

アンケートの結果を反映させ、Speakingを中心とした一般英語のクラス、アカデミック英語を扱うクラス、テスト対策に特化したクラス、CLIL形式のクラスをこれまでのIntegrated科目に置き換えることとした。授業の概要は、「1年次に学修したことを踏まえ、これらを統合して広く使う力を磨く」ことと、「様々な文化的背景を持つ人々とコミュニケーションをするために、国際共通語としての英語をアカデミックな観点から意識して使えるようになる」ことである。CEFRのB1～B2レベルの英語運用能力を身につけることができるよう、付録のとおり到達目標を掲げた。English for TestsとCLILの科目名・到達目標に含まれる「○○」は毎年度変わるものとし、3年で1サイクルとなるよう設定することで同一科目名の科目を複数回受講できるよう工夫している。

### Integrated科目との読み替え

残る問題は、Integrated科目との読み替えをどうするかということである。指導内容を勘案し、読み替えるうえで旧カリキュラムと新カリキュラム内で大きな齟齬が発生しないよう、表5のように読み替え案を作成し、その後英語部門会議で承認された。読み替え表作成時に留意した点は、国際園芸農学科3年次生の必修科目がAcademic Englishと重ならないかという点である。調査したところ通年で水曜の5-6、7-8時限に必修科目があったことから、少なくとも初年度は旧カリキュラムにおいて3年次前期に履修する計画となっていたIntegrated Cの読み替え科目であるAcademic Writing & Presentationを火

曜 5－6 時限に設定し、残りの科目については表 3 で示した火曜 5－6 時限と水曜 7－8 時限に割り振ることとした。なお、国際園芸農学科の学生が専門科目の都合で Academic English を履修できない場合は夏季に集中講義を開講することを検討事項として挙げていたが、2023 年度はこの対応は不要であった。

表 5

旧カリキュラムと新カリキュラムの単位読み替え

新科目名	読み替え	開講時間割
English for Global Communication	Integrated A (2 年前期)	後期 火 5－6
Academic Writing & Presentation	Integrated C (3 年前期)	前期 火 5－6
English for Tests: ○○		後期 水 7－8
Content and English Integrated Learning: ○○	Integrated B 1 (2 年後期)	前期 水 7－8

### 今後の課題

2023 年度は本稿で計画した内容どおりに改革初年度の Academic English 科目を実施できている。本稿執筆段階では後期が完了していないため、カリキュラムの評価は来年度以降への宿題となるが、現状想定されている問題点がいくつかある。1 年次生の入学時英語プレースメントテストや英検 TOEIC 等による「大学以外の教育施設等における学修」の単位認定制度で単位認定された 1 年次の学生を Academic English に誘導する流れを確かなものとしたい。プレースメントテスト後、条件を満たす学生で単位認定を希望する学生には履修相談に出席するように指示し、履修相談の席で Academic English を受講するように誘導した結果、4 名が Academic English の授業に履修登録したが、単位認定された人数を考えると十分であるとは言えない。前期科目の履修を免除された学生が後期に再度 1 年次科目に戻る際、学力が低下する傾向が見られるため、前期の単位認定者には Academic English を履修してほしいと筆者らは考えている。しかし、他科目の時間割の問題や特に医学部の学生に関してはキャンパス間の移動が発生するため実現が難しい側面がある。これらの問題を打破し、Academic English を積極的に受験してもらえる環境を構築する必要があると考えている。

また、現状では Academic English 履修者には課していないが、学期末（学年末）における VELC Test を Academic English 履修者にも課して 1 年次生と能力の比較を行いたいと考えている。そうすることによって、2 年次以上の学生にあって 1 年次の学生に不足しているものがなにかを明らかにすることが可能となるだろう。また、1 年次科目と Academic English に一貫性を持たせるために学期末の VELC Test を実施することは有意義なものとなるだろう。ただし、成績評価に入れるか否かについては議論の余地が残る。この他、『教養教育英語科目学習ガイドブック』に Academic English 向けの内容を含めるなどして、Academic English で扱う内容の一部を 1 年次の学生の目に入れることで興味を引かせることも必要だろう。そのために、今後『教養教育英語科目学習ガイドブック』の内容をアップデートする予定である。

## 謝 辞

本調査のアンケートに回答して下さった学生のみなさま, インタビューにご協力いただいた学生のみなさまに感謝申し上げます。

## 引用文献

- Birdsell, B. J. & Tatsuta, N. (2021). Using a CLIL Approach to Teach Psychology in a Liberal Arts English Program. *The 85th Annual Convention of the Japanese Psychological Association*. September 1, 2011. Online.
- Solomon, J., & Birdsell, B. J. (2022). Reforming English courses in the liberal arts program: Answering the “why” and “how” of this curriculum change. *The 61st JACET International Convention*. August 24, 2022. Online.
- 立田夏子, 横内裕一郎, バードセール・ブライアン・ジョン, & ソロモン・ジョシュア・リー. (inpress). 「教養教育英語科目1年次科目のカリキュラム改革と検証」『弘前大学教養教育開発実践ジャーナル』, 8. 27-35.
- 弘前大学教育推進機構. (2023). 『令和3（2021）年度教養教育科目マニュアル』
- 横内裕一郎, 立田夏子. (2023). 『弘前大学教養英語科目学習ガイドブック』金星堂

## 付 録

### 各高年次科目の現行の到達目標

#### English for Global Communication

1. 世界の多様な英語 (Englishes) に触れ, 身近な話題について英語でやり取りができるようになること
2. 身近な話題について英語で討論し, さまざまな意見を理解した上で自分の主張を述べるようになること

#### Academic Writing & Presentation

1. 英語で研究論文を書く上での基本的技法 (出典や参考文献の表記法, スタイルなど) に関する知識を習得し, 興味関心がある分野についてのレポートを英語で書くことができるようになること
2. 英語で研究発表を行う上での基本的技法に関する知識を習得し, 興味関心がある分野についてのプレゼンテーションを行うことができるようになること

#### English for Tests: ○○

1. 指定された英語能力測定試験の試験形式に慣れ, 効果的に問題を解く能力を習得すること
2. Listening の訓練を通じ, 様々な種類の英語発音に触れ, 国際共通語としての英語を習得すること
3. Reading の訓練を通じ, 様々な表現を学び, 特に, discourse markers 等を中心に指定された英語能力測定試験で多用される単語を習得すること

#### Content and English Integrated Learning : ○○

1. 英語による活動を通して, 指定された教科・科目やテーマについての知識を習得すること
2. 指定された教科・科目やテーマについて自分の見解を英語で表現することができるようになること